

親鸞の法界身理解について

武 田 晋

はじめに

『観無量寿経』第八像観⁽¹⁾の文には、

仏告阿難及韋提希見此事已次当想仏所以者何諸仏如来是法界身入一切衆生心想中是故汝等心想仏時は心即是三十二相八十随形好是心作仏是心是仏諸仏正遍知海從心想生是故应当一心繫念諦観彼仏多陀阿伽度阿羅訶三藐三仏陀想彼仏者先当想像……

仏、阿難および韋提希に告げたまはく、「この事を見をはらば、次にまさに仏を想ふべし。ゆゑはいかん。諸仏如来はこれ法界身なり。一切衆生のお心のうちに入りたまふ。このゆゑになんぢら心に仏を想ふ時、この心すなはちこれ〔仏の〕三十二相・八十随形好なれば、この心作仏す、この心これ仏なり。諸仏正遍知海は心想より生ず。このゆゑにまさに一心に繫念して、あきらかにかの仏、多陀阿伽度⁽²⁾・阿羅訶⁽³⁾・三藐三仏陀⁽⁴⁾を觀ずべし。かの仏を想はんものは、まづまさに像を想ふべし。……

と、仏菩薩の像を想うという観想念仏の文言の冒頭に「諸仏如来はこれ法界身なり」とあり、この仏が一切衆生の心

（聖典全書一・八六頁、註釈版・九九〜一〇〇頁）

想に入り、「是心作仏是心是仏」すると教説される。

『觀經』における觀想の対象は、淨土の依報（国土）、正報（仏・菩薩）の莊嚴のことであり、淨土の莊嚴を対象として、心に想うことを觀という。「觀」はまた觀念、觀察、觀法、觀行等ともいわれて、精神を統一して清淨な智慧をもつて対象を思索し想念することでもある。これを曇鸞は『往生論証』巻下に、

心にその事を緣ずるを「觀」といふ。觀心分明なるを「察」といふ。
（註釈版七祖篇・一〇七頁）

と述べ、さらにまた、

「毘婆舍那」を訳して「觀」といふ。ただ汎く觀といふには、義またいまだ滿たず。なにをもつてこれをいふとならば、身の無常・苦・空・無我・九想等を觀ずるがときをも、みな名づけて觀となせばなり。

（註釈版七祖篇・一〇六頁）

といい、対象を心で緣ずることや具体的事象を觀想することの他に、抽象的理念を思念することも「觀」であるとする。サンスクリットの「毘婆舍那 vipaśyana」の意味は広く、この「觀」の一字をもつて容易にその多くの意義をあらわすことは困難である。

したがって、この第八像觀の法界身の理解や「是心作仏是心是仏」の理解も諸師において多様である。そこで拙論では、諸師のこれらの理解を確認する事を通じて、親鸞淨土教における法界身理解の特色を一考するものである。

一 諸師の「法界身」理解

善導の理解によるならば、第八像觀は阿弥陀仏の淨土の真仏を觀ずるに先立つて、その準備のための仮觀として仏像を觀ずる事である。それは、七宝に輝く仏坐像とその左右の蓮華を觀じ、左に觀世音菩薩、右に大勢至菩薩の坐したまうを觀じ、その一仏・二菩薩が遍滿している事を觀じ、この觀法ができたならば、觀想の行者は淨土の水流や光

明などが、みな妙なる法を説くを聞くであろうとするものである。このような水流や光明の説法と仏の説く経説が合うならば、極楽世界をほぼ見たということができるといふ観法である。

その冒頭に「諸仏如来はこれ法界身」とあるが、「諸仏如来」はここでは阿弥陀仏を指すことは問題無かろうが、「法界身」については諸師の理解はこれを異とする。

そもそも「法界」とは、事理に通じる名にして、通仏教においては、普遍の真理、すなわち諸法の真実の体性である真如を意味する場合（真如法性）、一切諸法を呼ぶ名にして各諸法の事別なるを意味する場合、また、その法界を生ずる心に随えて衆生の心を法界という場合がある。⁽⁶⁾

例えば、『大般若経』三八卷（大正五・二二二頁b）には、真如に十二名ある中の第二に「法界」の名があり、『華嚴経』（六十華嚴）には、

心如工画師 画種種五陰 一切世界中 無法而不造 如心仏亦爾 如仏衆生然 心仏及衆生 是三無差別

心は工なる画師の如く、種々の五陰を画く。一切世界中、法として造られざる無し。心の如く仏も亦た爾なり。仏の如く衆生も然なり。心と仏、及び衆生の、是の三は無差別なり。（大正九・四六五頁c）

と、心と仏および衆生の三は真如法性の諸相とし、法性よりみるならば心も仏も衆生も無差別であるとする。⁽⁷⁾

また、事相としては同じく『華嚴経』には「仏身充滿諸法界」（大正九・四〇八頁a）とし、善導は『往生礼讃』に「真形光明徧法界」（聖典全書一・九四九頁）、『般舟讃』に「身上光明徧法界」（聖典全書一・九九五頁）・「同学相隨遊法界」（聖典全書一・九八六頁）と述べ、仏身や光明が法界に遍じて衆生に応受されるとする。このように、その理解において事理に渡る面がある。

以下に、代表的な聖道諸師の「法界身」理解を「是心作仏是心是仏」理解と関連して窺う事とする。

先ず、浄影寺慧遠（五二三～五九二）は、『観無量寿経義疏』には、

一に「心是仏」を明かす。「是故」というのは前に乗じて後を顯す。是の仏は法身、一切衆生の心に入る故、心に仏を想う時、是の心、即ち諸仏の相好なり。

（大正三七・一八〇頁a、淨全五・一八五頁下）
と、「是心是仏」は、衆生が仏の相好の身を想う心（是心）に、この仏は法身となる（是仏）と理解する。慧遠は『觀經』を「觀仏三昧為宗」（大正三七・一七三頁a）といい、觀仏に仏平等法門之身を觀する真身觀と仏如来共世間身を觀する応身觀の二種があるとする。

『大乘義章』（大正四四・八三九頁b）によると、如来藏心という有為無為の一切を含む真識を本とし法身（体）・報身（相）・応身（用）の三身が現れることより、如来藏という煩惱に覆われている状態がなくなれば法身という。すなわち、衆生の心には一切の法を生み出す如来藏があるので、相好の仏も生み出すことができる。したがって、「是心作仏」を解釈されて、

云何が「作」と名づくる。云何が「是」と名づくる。両義分別するに、一には仏觀の始終に就いて分別する。始学は「作」と名づく。終成は即ち「是」とす。二に現当に分別す。諸仏の法身、己に与えて同体なり。現に仏を觀する時、心中に現するは即ち是れ諸仏法身の体となし「心是仏」と名づく。己は当果に望む。觀由り彼を生ずるに「心作仏」と名づく。上來第二に勧むる所以を釈す。

（大正三七・一八〇頁a、淨全五・一八五頁下～一八六頁上）
と述べ、「是心作仏」は始学（麁淨信觀）についていうものであり、修行する段階より仏果をみて「作」といい、「是心是仏」は終成（仏果）からみたもので、諸仏の法身は「是心」と同体という。このように、慧遠は『觀經』全体（所觀の仏）を応身觀とし、根底に如来藏思想があることより、衆生の自性は清淨の仏性で、その仏性を觀ずるという意味の「自性清淨仏性の觀」という理觀の立場で「法界身」を解釈される。

次に、天台大師智顗（五三八～五九七）は、『觀經』を「心觀為宗実相為体」（大正三七・一八六頁c）とし、その

観は「観者観也有^ニ次第三観^ト一心^ニ中三観^ト」(同・一八七頁b)とする。

第八像観の法界身を報仏法性身としたうえで、感応道交と解入相應の二釈で解釈される。始覚の妙解と本覚法性の理とが相應し冥会するところに法界身が現れるとする。即ち、行者が『観經』の他境の仏に託して、空仮中の三觀の淨心念仏をするとともに、その能觀の行者の心想に能應の仏身(応身)が入り至る。衆生淨心の機感に應じて感応道交して応身の三十二相が現ずる。また、生仏不二の故に、始覚の智が起り、觀解を得れば(解)、衆生心は本来仏の故に、觀解の心に本覺の理仏が顯現し(入)、理智冥合(相應)するといふのである。

したがって、「是心作仏是心是仏」についての理解も、「是心作仏」について、「仏本は無心淨^{キガニナリ}故有^ニ」(大正三七・一九二頁b)と法身が能應の仏(応身)として、衆生心中に現れることとする。続いて「亦因^ニ此三昧心^ニ終成作^レ仏也」(同上)と、始覚の三昧心により本覺の理の法身が現れ、三昧心により自己当果の仏を成ずる事とするのである。「是心是仏」についても、能應の仏があるとすると、心仏は異なるという誤解があるので「條然有異」(同上)と、この心がそのまま仏であるとする。そして、「心外無^レ仏亦無^ニ仏之因^ニ」(同上)と我心は本来仏であり、故に果仏は三昧の心の外になく、三昧の仏因もまた果仏の外になく、心因と仏果の体一不二とした⁽⁸⁾。

このように、智顗は、觀想の心に顯れる仏は、本来心に具している本覺法身であるとし、衆生が真如本覺する外に仏はなく、西方の阿弥陀仏に託して、一心三觀の理觀を修して、心性本具の本覺法身を開覺しようとした。

次に、嘉祥大師吉藏(五四九〜六二三)は『觀無量壽經義疏』に、

「仏告阿難」より下第二は、像仏菩薩を想うに、復二と為す。第一に法身仏を想う。第二に応身仏を想う。今は即ち第一の法身仏を想う。法身仏は文に「如來是法界身」と云う。即ち是れ法身なり。一切皆是れ法界、一切皆是れ法身。故に前に此の想を作す也。

(大正三七・二四三頁c、淨金五・三四七頁上下)

と、觀仏に二種をあげて、法身仏を觀想する觀と、如來の三十二相等(應身)を念ずる觀とを示す。また、「法身」

すなわち「法界」と考えている。「是心作仏」の「是心」は三十二相の応身で、「是心是仏」は法身であり、応身と法身の二身の因を明かす文とみている。

したがって、法界身は法身観である。『観経』の第八像観に仏像を観じる具体的な観法は、法身を観ずることのできない鈍根者の観法で応身観とし、法身観と別々な観法として捉えている。また、阿弥陀仏を観ずるは化仏身を観ずるところに限定されており、「諸仏如来」は、阿弥陀仏ではなく無色無心無仏の法身とする。このように、吉蔵の観法も「自性清淨仏性観」の解釈と理解できよう。

最後に、善導大師当時に所破の対象とされた唯識法身観については、撰論学派の『観経』理解を指していると思われるが、例えば善導大師の弟子の懷感禪師の『釈淨土群疑論』後半には「是心作仏是心是仏」を法相教義に基づき唯識所変にて解釈して、「案^三唯識之理^二心外無^三別法^二方法万相皆是自心^一」（大正四七・六六頁a）と心の外に別法なく、万法はすべて心の変現で、この心によって仏を観ずるとする。すなわち能観の心は相分（客観）を照らす見分（主観）であり、見分の作用を証知する作用として自証分を離れない。したがって、見分の力が相分を現じることを「是心作仏」といい、「是心是仏」は、相分がそのまま自証分の心で別体がないことをいい、これを「諸仏正遍知海從心想生」と理解する。

以上、雑駁ではあるが、聖道門の諸師は自性清淨仏性観や唯識法身観といったいわゆる理法身として法界身を理解されている。

二 曇鸞・善導の「法界身」理解

聖道諸師は、理に約して法界即身の義とするが、淨土門諸師ではこれをどう解釈するのであろう。

真宗七祖においては、曇鸞大師（四七六～五四二）は、『往生論註』卷上の身業功德積の文に第八像観の文につい

て問答されて、

問ひていはく、『観無量寿經』にのたまはく、「諸仏如来はこれ法界身なり。一切衆生の心想のうちに入る。このゆゑに、なんぢら心に仏を想ふ時、この心すなはちこれ三十二相・八十随形好なり。この心作仏す。この心これ仏なり。諸仏正遍知海は心想より生ず」と。この義いかん。

答へていはく、「身」を集成と名づく。「界」を事別と名づく。眼界のごときは根・色・空・明・作意の五の因縁によりて生ずるを名づけて眼界となす。これ眼ただみづからおのが縁を行じて他縁を行ぜず。事別なるをもつてのゆゑなり。耳・鼻等の界もまたかくのごとし。「諸仏如来はこれ法界身なり」といふは、「法界」はこれ衆生の心法なり。心よく世間・出世間の一切諸法を生ずるをもつてのゆゑに、心を名づけて法界となす。法界よくもろもろの如来の相好の身を生ず。また色等のよく眼識を生ずるがごとし。このゆゑに仏身を法界身と名づく。この身、他の縁を行ぜず。このゆゑに「一切衆生の心想のうちに入る」となり。「心に仏を想ふ時、この心すなはちこれ三十二相・八十随形好なり」といふは、衆生の心に仏を想ふ時に当りて、仏身の相好、衆生の心中に顕現するなり。たとへば水清ければすなはち色像現ず、水と像と一ならず異ならざるがごとし。ゆゑに仏の相好の身すなはちこれ心想とのたまへるなり。「この心作仏す」といふは、心よく仏を作るといふなり。「この心これ仏」といふは、心のほかに仏まします。たとへば火は木より出でて、火、木を離るることを得ず。木を離れざるをもつてのゆゑにすなはちよく木を焼く。木、火のために焼かれて、木すなはち火となるがごとし。「諸仏正遍知海は心想より生ず」といふは、「正遍知」とは真正に法界のごとくにして知るなり。法界無相なるがゆゑに諸仏は無知なり。無知をもつてのゆゑに知らざるはなし。無知にして知るはこれ正遍知なり。この知、深広にして測量すべからず。ゆゑに海に譬ふ。

（傍線筆者、聖典全書一・四七四～四七五頁、註釈版七祖篇・八一～八三頁）

と、「法界」は衆生の心法、心を名づけて法界とする。心は世間・出世間のまろもろの事象を生起するものであり、「色」等の眼識を生ずるように、諸々の如来の相好身を生起する。特にここでは、仏を觀じる時の衆生能觀のいわゆる第六意識を指している。

「身」は、諸仏如来の仏身（十力、四無畏、十八不共法）とし、法界が身の依主釈である。衆生の能觀の意識の上に相好の仏身を緣じている「法界所生の身」という義で法界身を解釈される。

したがって、「是心作仏」は、心よく仏を作るということで、衆生能觀の心が仏の相好仏身を生ずる。「是心是仏」は、心のほかに仏ましまさずということ、能觀の心の上へいま初めて西方の弥陀の相好仏身は現じたという事である。このように衆生心と法界身とは能所の違いがあるから不一であるが、能觀の心に仏が顯現した時、心の外に仏身はないから不異なのである。また、木火の譬をもつて、「火」を所觀の仏身・仏の相好身とし、「木」を衆生の能觀の心と譬えて、木が火のために焼かれて火となるのは、心外無仏のことで、能觀の心と所觀の仏が体一となる「是心是仏」とする。このように曇鸞は「法界身」を基本的には事觀による仏身とする。

また、善導大師（六一三〜六八一）は『觀經疏』『定善義』に、

八に像觀のなかにつきて、また先づ挙げ、次に弁じ、後に結す。……問ひていはく、韋提の上の請にはただ弥陀を指す。いぶかし、如来いま総じて諸仏を挙げたまふ、なんの意かあるや。答へていはく、諸仏は三身同じく証し、悲智の果円かなること等齊にして二無く、端身一坐にして影現すること無方なり。意、有緣に赴く時、法界に臨むことを顯さんと欲す。「法界」といふは三義あり。一には心遍するがゆゑに法界を解す。二には身遍するがゆゑに法界を解す。三には障礙なきがゆゑに法界を解す。まさしくは心到るによるがゆゑに、身また隨ひて到る。身は心に隨ふがゆゑに「是法界身」といふ。「法界」といふはこれ所化の境、すなはち衆生界なり。「身」といふはこれ能化の身、すなはち諸仏の身なり。「入衆生心想中」といふは、すなはち衆生念を起して諸仏を見た

てまつらんと願ずるによりて、仏すなはち無礙智をもつて知り、すなはちよくかの想心のうちに入りて現じたまふ。ただもろもろの行者、もしは想念のうち、もしは夢定のうちに仏を見たてまつるは、すなはちこの義を成ずるなり。三に「是故汝等」より下「從心想生」に至るこのかたは、まさしく利益を結勸することを明かす。これ心を標して仏を想ふことを明かす。ただ仏解をなして頂より足に至るまで心に想ひて捨てず、一々にこれを觀じてしばらくも休息することなかれ。あるいは頂相を想ひ、あるいは眉間の白毫乃至足下千輪の相を想へ。この想をなす時、仏像端嚴にして相好具足し、了然として現じたまふ。すなはち心一々の相を縁ずるによるがゆゑに、すなはち一々の相現ず。心もし縁ぜずは衆相見るべからず。ただ自心に想作すれば、すなはち心に應じて現ず。ゆゑに「是心即是三十二相」といふ。「八十隨形好」といふは、仏相すでに現ずれば、衆好みな隨ふ。これまさしく如来もろもろの想者を教へて具足して觀ぜしめたまふことを明かす。「是心作仏」といふは、自の信心によりて相を縁ずるは作のごとし。「是心是仏」といふは、心よく仏を想へば、想によりて仏身現ず。すなはちこの心仏なり。この心を離れてほかにさらに異仏なければなり。「諸仏正遍知」といふは、これ諸仏は円滿無障礙智を得て、作意と不作意とつねによくあまねく法界の心を知りたまへり。ただよく想をなせば、すなはちなんぢが心想に従ひて現じたまふこと、生ずるがごとしといふことを明かす。あるいは行者ありて、この一門の義をもつて唯識法身の觀となし、あるいは自性清淨仏性の觀となすは、その意はなほだ錯れり。絶えて少分もあひ似たることなし。すでに像を想へといひて三十二相を仮立せるは、眞如法界の身ならば、あに相ありて縁ずべく、身ありて取るべけんや。しかも法身は無色にして眼対を絶す。さらに類として方ぶべきなし。ゆゑに虚空を取りてもつて法身の体に喩ふ。またいまこの觀門は等しくただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。総じて無相離念を明かさず。如来（釈尊）はるかに末代罪濁の凡夫の相を立てて心を住むるすらなほ得ることあたはず、いかにいはんや相を離れて事を求むるは、術通なき人の空に居して舍を立つるがごとしと知りたまへり。

（傍点筆者、聖典全書一・七四三～七四四頁、註釈版七祖篇・四三〇～四三三頁）と、「法界」とは所化の境で、諸仏の大悲が「応心即現」する世界とする。それは、大慈悲心が遍満し（心遍）、仏身が形をとって顕現し（身遍）、何時でも何処でも誰の上にも現れる（無障礙）世界である。よって、「法界」とは所化の境界であり衆生界である。

また、「身」とは、諸仏如来すなわち阿弥陀仏であるが、大慈悲心に随う身であるので、能化の仏身である。

したがって、「是心作仏」は、自らの信心によりて相を縁するは作のごとしとし、「是心是仏」は心よく仏を想へば、想によりて仏身現すと理解する。善導は報身の阿弥陀仏は法界身で、大悲が所化の衆生界に常に応じる事仏身（相好身）とする。よって、「あるいは自性清浄仏性の観となすは、その意はなはだ錯れり。絶えて少分もあひ似たることなし」といい、基本的には事観としてみている。特にそれは凡夫の観であるとするが、その観は「われいま仏力によるがゆゑにかの国土を見る」（註釈版七祖篇・三二〇頁）といわれるように仏力による観である。⁽¹⁰⁾

慧遠や智顗等の諸師は仏を一切に遍満する法性真如と見て、これを観想により開覧するとしたのに対して、善導は大慈悲の仏が衆生を救済するため觀察の対象として色身を現することとみている。また、「是心作仏」の「作」の語を造作の義に解釈して、心によく仏を想い作すならば心中に顕現し、心に仏を想わなければ仏は現前せず、心に仏を想うことを離れて仏心は存在しないので「是心是仏」としている。このような見仏の境地は三昧発得の境地でもある。以上のように、浄土門では法界身を、聖道諸師のような不二法門によって解釈せず、不二を全うした而二の立場で法門が建立されている。そこには凡夫を対象にした指法立相など、差別の立場から法門が建立されているといえる。

三 親鸞と莊嚴性功德

親鸞においては、「法界」についての明確な解釈はなく、『華嚴經』入法界品からの引用は多数あるのであるが、い

わゆる自釈中においての「法界」の用例は一例である。

清浄無礙の光耀朗らかにして、一如法界の真身顕る。信を発して称名すれば、光摂護したまふ、また現生無量の徳を獲。

（浄土文類聚鈔「念仏正信偈」、聖典全書二・二六八頁、註釈版・四八六頁）
と、念仏正信偈の一句中に「一如法界」と術語で述べられているだけで、「法界身」に関する詳細な解釈はされていない。したがって、親鸞にける法界身理解は、法界に関する引用文等の前後の意図から分別していくしかない。

ところで、親鸞は、『唯信鈔文意』に「涅槃」を転釈されて、

「涅槃」をば滅度といふ、無為といふ、安樂といふ、常樂といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ。仏性すなはち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちたまへり、すなはち一切群生海の心なり。この心に誓願を信樂するがゆゑに、この信心すなはち仏性なり、仏性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。

（聖典全書二・七〇一―七〇二頁、註釈版・七〇九頁）

と、真如法性が微塵世界にみちみちたまへりといい、それは一切群生海の心であると述べ、誓願を信樂するが故に、この信心すなわち仏性なりとされる。このような信心成就に関する帰命の心たる信に係する点で真如法性が問題とされる。続く文には、

法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、ころもおよばれず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身と申す御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらはれたまふ御かたちをば、世親菩薩（天親）は「尽十方無礙光如来」となづけたてまつりたまへり。この如来を報身と申す。誓願の業因に報ひたまへるゆゑに報身如来と申すなり。報と申すは、たねにむくひたるなり。この報身より応・化等の無量無数の身をあらはして、微塵世界に無礙の智慧光を放たしめたまふゆゑに尽十方無礙光仏と申すひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず、無明の闇をはらひ悪業に

さへられず、このゆゑに無礙光と申すなり。無礙はさはりなしと申す。しかれば、阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとするべし。……

（聖典全書二・七〇二〜七〇三頁、註釈版・七〇九〜七一〇頁）

と、『往生論註』浄入願心章で述べられる二種法身による由生由出の關係から影響を受けて、無為・実相・真如・法性・仏性・如来・智慧・慈悲・平等の展開で仏身や浄土が論じられる。

また、親鸞は『教行信証』『真仏土巻』に、『往生論註』の莊嚴性功德成就の文を引用して、「正道の大慈悲」を解説される次の部分に注目される。

またいはく（論註・上六〇）、〈正道の大慈悲は、出世の善根より生ず〉（浄土論）とのたまえり。この二句は、莊嚴性功德成就と名づく。至乃 性はこれ本の義なり。いふところは、これ浄土は法性に随順して法本に乖かず。事、『華嚴經』の宝王如来の性起の義に同じ。またいふところは、積習して性を成ず。法蔵菩薩を指す、もろもろの波羅蜜を集めて積習して成ぜるところなり。また性というは、これ聖種性なり。序めに法蔵菩薩、世自在王仏の所にして無生忍を悟る。その時の位を聖種性と名づく。この性のなかにおいて四十八の大願を発して、この土を修起したまへり。すなわち安樂浄土といふ。これかの因の所得なり。果のなかに因を説く、ゆゑに名づけて性とす。また性といふは、これ必然の義なり、不改の義なり。海の性、一味にして衆流入るものかならず一味となつて、海の味はひ、かれに随ひて改まらざるがごとしとなり。また人身の性不浄なるがゆゑに、種々の妙好色・香・美味、身に入りぬれば、みな不浄となるがごとし。安樂浄土はもろもろの往生のひと、不浄の色なし、不浄の心なし、畢竟じてみな清浄平等無為法身を得しむ。安樂国土清浄の性、成就したまへるをもつてのゆゑなり。〈正道の大慈悲は、出世の善根より生ず〉といふは、平等の大道なり。平等の道を名づけて正道とするゆゑは、平等はこれ諸法の体相なり。諸法平等なるをもつてのゆゑに発心等し、発心等しきがゆゑに道等し、道等しきがゆゑに大慈悲等し。大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆゑに、〈正道大慈悲〉とのたまえり。慈悲に三縁あり。

一つには衆生縁、これ小悲なり。二つには法縁、これ中悲なり。三つには無縁、これ大悲なり。大悲はすなはちこれ出世の善なり。安樂浄土はこの大悲より生ぜるがゆゑなればなり。ゆゑにこの大悲をいひて浄土の根とす。ゆゑに《出世善根生》といふなり」と。
(聖典全書二・一七〇〜一七一頁、註釈版・三五八〜三五九頁)

と、ここで法性功德、浄土の本質たる「性」に四義(理・行・位・果)を示される。

第一に、本の義とは、浄土の根本の本質は「法性に随順して法本に乖かず」と、浄土は法性・寂滅・無相そのものであるとする。またそれは、『華嚴經』宝王如來の性起の義に同じとされる。⁽¹²⁾「宝王」とは意のままに様々な願いをかなえる宝である「摩尼宝珠」のことで、真如(法性法身)が衆生を救うためにその衆生にとつて最高の宝(方便法身)となつて現れるということである。よつて浄土とは、法性に随順するが故に無相にあらずして第一義諦が世俗諦に展開する性質、すなわち衆生救済の働きかけをもっているといえる。

第二には、性の積習の義である。性は積習して性を成ずとは、「本の義」で仏の本質である法性法身が衆生を救うために方便法身となり現れると示されたが、具体的には方便法身たる法蔵菩薩が因果の道理によつて仏になると説かれる。法蔵菩薩が兆載永劫の修行功德を積んで「性」を成就したのである。

第三には、聖種性の義である。「聖種」とは仏になる種子のことで、「聖種性」とは聖者になりうる位に住する菩薩、すなわち法蔵菩薩が世自在王仏のもとで無生法忍を得た位(初地)が聖種性である。この「性」により法蔵菩薩は四十八願を発こし浄土を建立されたので、「これかの因の所得なり。果の中に因を説く」と、真如法性の「性」が因となつて阿弥陀仏という果が生じたということである。「聖種性」は直接的には菩薩の位のことであるが、真如の十方世界に遍満している仏性といえる。このように因果同時の關係が、修起された浄土の内実として語られる。

第四には、「必然の義」「不改の義」である。ここで海の性が譬喩され、海は多くの河川から綺麗な水、汚染された水、それぞれ異なる水が流れ込んで、しかも一度それらが流れ込むとやがてすべて同一の海水の味になる必然の義が

ある。また、一度河川の水が海水の味になると再び河川の水に戻ることはないという不改の義がある。愚悪の凡夫であっても、浄土に往生すればそこには不浄な場も心も存在せず、自ずから清浄に転ぜられる。浄土の清浄性が、浄土に生まれた一切の者を清浄平等無為法身になさしめる。

このように、浄土は阿弥陀仏が一切の衆生を平等に救おうと願った大慈悲によつて成就された「平等の大道」だと述べられる。平等の道を正道とするのは、平等こそが諸法の体相であり、如理平等であるからこそ発心が等しく、道等しく大慈悲が展転していく。⁽¹³⁾ よつて、一如平等の悟の心から大慈悲が生まれ、そして大慈悲によつて仏道が成り立つ。阿弥陀仏の大慈悲によつて一切の衆生が救われるその平等性こそが浄土の「性」といわれる。

このような『論註』の性功德の展開は、親鸞の法界身理解においても大いなる影響を与えたものと考えられる。

四 親鸞の法界身理解

そもそも親鸞において、『観経』における觀察はどのように捉えられていたのであろう。これについては「化身土巻」隠顕釈に、『観経』の教説について次のように述べられる。

ここをもつて『経』（観経）には、「教我觀於清浄業処」といへり。「清浄業処」といふは、すなはちこれ本願成就の報土なり。「教我思惟」といふは、すなはち方便なり。「教我正受」といふは、すなはち金剛の真心なり。

「諦觀彼国浄業成者」といへり、本願成就の尽十方無礙光如来を觀知すべしとなり。「広説衆譬」といへり、すなはち十三觀これなり。「汝是凡夫心想羸劣」といへり、すなはちこれ惡人往生の機たることを彰すなり。「諸仏如来有異方便」といへり、すなはちこれ定散諸善は方便の教たることを顯すなり。「以仏力故見彼国土」といへり、これすなはち他力の意を顯すなり。「若仏滅後諸衆生等」といへり、すなはちこれ未來の衆生、往生の正機たることを顯すなり。「若有合者名為粗想」といへり、これ定觀成じがたきことを顯すなり。「於現身中得念仏三

味」といへり、すなはちこれ定観成就の益は、念仏三昧を獲るをもつて観の益とすることを顕す。すなはち観門をもつて方便の教とせるなり。「発三種心即便往生」といへり。また「復有三种衆生当得往生」といへり。これらの文によるに、三輩について、三種の三心あり、また二種の往生あり。……

（傍点筆者、聖典全書二・一八八頁、註釈版・三八二〜三八三頁）

と、『観経』に説かれる定散二善は如来の異方便であり、韋提希夫人は心想羸劣で粗想にしか浄土を観察できない凡夫であり、悪人往生の機である事を彰すとする。よつて、韋提希の見仏も仏力によるものであつて、観門は方便の教えという立場を取る。したがつて、第八像観のような観察をなす事ができない凡夫は、他力回向の信心による称名念仏による往生が隠彰にて説かれているとされる。

そこで、他力信心成就を述べる「信巻」末において、曇鸞と善導が第八像観を解釈した文を引文された箇所が注目できる。⁴⁴ その一連の流れは以下になる。

宗師（善導）の「専念」（散善義）といへるは、すなはちこれ一行なり。「専心」（同）といへるは、すなはちこれ一心なり。しかれば、願成就（第十八願成就文）の「一念」はすなはちこれ専心なり。専心はすなはちこれ深心なり。深心はすなはちこれ深信なり。深信はすなはちこれ堅固深信なり。堅固深信はすなはちこれ決定心なり。決定心はすなはちこれ無上上心なり。無上上心はすなはちこれ真心なり。真心はすなはちこれ相続心なり。相続心はすなはちこれ淳心なり。淳心はすなはちこれ憶念なり。憶念はすなはちこれ真実の一心なり。真実の一心はすなはちこれ大慶喜心なり。大慶喜心はすなはちこれ真実信心なり。真実信心はすなはちこれ金剛心なり。金剛心はすなはちこれ願作仏心なり。願作仏心はすなはちこれ度衆生心なり。度衆生心はすなはちこれ衆生を攝取して安樂浄土に生ぜしむる心なり。この心すなはちこれ大菩提心なり。この心すなはちこれ大慈悲心なり。この心すなはちこれ無量光明慧によりて生ずるがゆゑに。願海平等なるがゆゑに発心等し、発心

等しきがゆゑに道等し、道等しきがゆゑに大慈悲等し、大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆゑに。

『論の註』（下一四四）には、「かの安樂浄土に生れんと願するものは、かならず無上菩提心を発するなり」とのたまへり。

またはいく（同・上八二）、「是心作仏」（觀經）とは、いふところは、心よく作仏するなり。へ是心是仏（同）とは、心のほかに仏ましまさずとなり。たとへば火、木より出でて、火、木を離るることを得ざるなり。木を離れざるをもつてのゆゑに、すなはちよく木を焼く。木、火のために焼かれて、木すなはち火となるがごときなり」とのたまへり。

光明（善導）のいはく（定善義・意四三二）、「この心作仏す、この心これ仏なり、この心のほかに異仏ましまさず」とのたまへり。（以上）

ゆゑに知んぬ、一心これを如実修行相応と名づく。すなはちこれ正教なり、これ正義なり、これ正行なり、これ正解なり、これ正業なり、これ正智なり。

三心すなはち一心なり、一心すなはち金剛真心の義、答へをはんぬ、知るべしと。

（聖典全書二・九五―九六頁、註釈版・二五二―二五三頁）

と、信一念の解釈を承けて宗師である善導の言葉から「専念専心」を問題とされる一連の御自釈から続くかたちで連引される。ここで専念とは行であり南無阿弥陀仏であり、専心は回向された名号を聞信することによる眞実信心である。今の御自釈冒頭には、第十八願成就文である「信心歡喜乃至一念」という「心（信）」が問題とされる。成就文の一念の信がどういう内実であるかが説示されている。一連の転釈の中で、願作仏心度衆生心という菩提心が問題とされるが、衆生の菩提心が阿弥陀仏の無量光明慧によつて生じる大菩提心であり、願海平等なる阿弥陀如来により回向された発心であり、大慈悲が仏道の正因である事が述べられる。このような展開は前章で考察した性起の展開と同

内容といえる。

ただし、『論註』では「以諸法平等故発心等」とあるのが、ここでは「願海平等故発心等」としており、『論註』では阿弥陀仏の浄土の平等なる一如法性が顕現した性起の世界である浄土の徳として述べられているが、ここでは一切衆生を平等に救おうとする本願により、大慈悲・仏道の正因として、衆生に菩提心が与えられるという他力回向の信心・大菩提心をあらわす文章に転じられている。

これら一連の眞実信心成立に関する御自釈の後に引用されるのが、曇鸞と善導の第八像観に関する釈文である。よって、以下の引文においては第八像観を解釈した文言でありながら、『観經』当面の觀察の内容を問題とするのではなく、他力回向の信成就という事が釈された引文と見るべき文脈である。

最初の『論註』引文では「かの安樂浄土に生れんと願ずるものは、かならず無上菩提心を発するなり」と浄土往生に発菩提心が必要である事が述べられる。『観經』でいえば「かの国に生ぜんと願ずるものは、三種の心を発して即便往生す」と三心具足による往生であるが、そこには自力の発菩提心か他力回向の発菩提心かという点が問題となる。いま、一連の流れは他力回向の信成就を問題とするのであるから、以下の『論註』の「是心作仏是心是仏」解釈や木の譬もこのような展開から解釈されるべきである。

続く『論註』引文の「是心作仏」は、「是心」とは、願力回向の信心であり、「作仏」とは、「仏となる」と読めば、その信心が往生成仏の正因であり成仏の種といえ、この信心以外には成仏の因はないという意味になる。一方で、「作仏」を「仏をなす」と読めば、その信心は名号の業因によって仏心と凡心が一体となったという意味となる。文脈の流れから前者の意が適当かと考えられるが、今それによれば「是心是仏」は、願力回向の眞実信心以外には成仏の因はなく、信心が仏道の正因であるのは、それが大慈悲心・大菩提心の展開であるからだと理解できよう。

したがって、木の譬は、「火」である大慈悲心・仏心のはたらきを離れては、「木」である凡夫の心に信心は生ぜ

ず、木は火に焼かれて火となるように、他力の「大菩提心・大慈悲」によって凡夫は仏とならしめられることを譬えている。具体的に解釈するならば、木たる衆生の心（凡心）は、火である光明名号の働きかけにより（名号領受、他力回向の信が成立し、凡夫が成仏する事（火となる）を木と火によって譬えているといえる。¹⁰⁶

続く善導引文も一部の訓読を改変しての引用となっているが、他力回向の信心によって衆生が仏となり、この他力の信樂以外に異仏はないとされる。よって、他力の信樂たる一心を頂戴する事こそ「正教、正義、正行、正解、正業、正智」¹⁰⁸だとされる。後代に存覚が『六要鈔』に、この「信巻」引文箇所を解釈されて「弥陀法界身の故に、帰命の心を発せば機法不離にして必ず往生を得」（真聖全二・二九九頁）と述べられるところである。¹⁰⁹

このように法界身について論じる『観經』第八像觀の釈書は、一部分のみの引用であるが、他力回向の信成就が「是心作仏是心是仏」の釈文を通して述べられている。さすればこの譬喩における木火の譬である火は法界身とどのように関係するのであろう。

ここで、木に働きかける火とは、他力回向の信成立に関わるものであるから、自ずから「聞其名号信心歡喜」の名号こそが火に譬えられていると考えられる。ならば、名号が法界の衆生に働きかける身として理解されるわけであるが、そのような名号の展開は親鸞においては「行巻」にて述べられる。

特に「行巻」には、宋代の元照律師（一〇四八―一一一六）の『阿弥陀經義疏』の文が引用されている点は注目できる。この『阿弥陀經義疏』は先の曇鸞・善導の法界身解釈の文と同じく、親鸞は早くから注目されていた文で、『観經弥陀經集註』にも書き込みをされている。¹¹⁰ しかも、「行巻」に引用される同書には、元照が『阿弥陀經』を解釈された序文冒頭と四字名号が何故に諸善に超過せるかを述べた次の箇所が連引されている。当面の内容では唯識の教相が解釈された箇所であるが、次のように述べる。

一乗の極唱、終歸をことごとく樂邦を指す。万行の円修、最勝を独り果号に推る。まことにもつて因より願を建

つ。志を秉り行を窮め、塵点劫を歴て済衆の仁を懷けり。芥子の地も捨身の処にあらざることなし。悲智六度摂化してもつて遺すことなし。内外の両財、求むるに随うてかならず応ず。機と縁と熟し、行滿じ功なり、一時に円かに三身を証す。万徳すべて四字に彰る」と。(以上)

またいはく(同)、「いはんやわが弥陀は名をもつて物を接したまふ。ここをもつて耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す。永く仏種となりて頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証す。まことに知んぬ、少善根にあらず、これ多功德なり」と。(以上)

(聖典全書二・四四頁、註釈版・一八〇頁)

と、ここに万行円備の番号は、阿弥陀仏が名をもつて衆生を摂化する働きであり、無辺の聖徳(仏智)が識心に攬入し、永く仏種となりて頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証すると端的に述べられるところである。

結びにかえて

親鸞においては『観経』第八像觀に示されるような觀察行は凡夫には不可能なる行業とみられているが、その文中の法界身の理解をめぐっては法界身觀が独自に展開したかたちで理解されている。すなわち、聖道諸師の理法界身や浄土教祖師の事法界身理解とは相違したかたちで、曇鸞・善導の釈文を承けている。

法界身とは「法界」が迷いの衆生界に働く「身」であり、阿弥陀仏であり、より具体的には智慧の光明名号であるとしている。よって、親鸞は、諸師や浄土教祖師が当面では事理の觀で釈される「是心作仏是心是仏」の文言も、『教行信証』の引用展開においては名号聞信の一念において願力回向の信心が大慈悲心の展開であり、仏道の正因であることを解釈された文を助顯した文として受容展開されているのである。

註

「聖典全書」は『浄土真宗聖典全書』を意味する。原漢文のものは訓読が問題とならない場合には『浄土真宗聖典（註釈版）』等によって書き下し文とした。

(1) 善導は『観經』の觀察を定善（息慮凝心・心を統一して行う善、第一観・第十三観）と散善（魔惡修善・平生の散乱した心のままで行う善、第十四観・第十六観）とに大別するが、慧遠の場合には善導が序分において散善顯行縁とした三福の教説をもって正宗分散善とし、十六観全部を定善と定義している。基本的に、善導は慧遠の使用した呼称を踏襲するのであるが、『観經』や科段全体の捉え方には相違が存在する。いま、第八観は慧遠においては「仏菩薩像觀」とするが、ここでは善導により「像觀」（聖典全書一・六〇九頁など）と呼称する。

(2) 正遍知は梵語の samyak-sambuddha（サンミヤク・サンブツダ）の漢訳で、如来十号の一。等正覺ともいう。海とは仏の遍くさとられた智慧の広大なることを喩える。正しく完全に真理をさとったあらゆる仏陀たちの意味。

(3) 梵語の tattagata（タターガタ）の音写。如来のこと。

(4) 梵語の arhat（アルハット）の音写。応供・阿羅漢ともいう。

(5) 梵語の samyak-sambuddha（サンミヤク・サンブツダ）の音写。等正覺・正遍知と漢訳。最上至上の仏・正しいさとりを得た人。如来十号の一。

(6) 『龍谷仏教大辞彙全卷五』・『望月仏教大辞典』・『法藏館新版仏教学辞典』等より抜粋。

(7) 一切が唯心の所現とするこの偈、同經に「三界虚妄、但是心作」（大正九・五五八頁c）とともに唯心を説く偈として有名で、中国仏教界ではこの偈を根拠に心と仏と衆生の無差別が主張される。

(8) 『観經疏』は現在では智顗の疏とは見なされていないが、他にも「法界身とは報仏の法性なり。衆生心の淨なり。法身自在なるがゆえに、衆生の心想のなかにいるという」（大正三七・一九二頁b）と、衆生の心は本来清淨で、觀仏三昧を修すれば解行相應するから清淨な心性に仏身があらわれ、心と仏と一体となり、仏の三十二相、八十随形好を具有することができるとしている。

(9) この木火の譬は『遺日摩尼經』（大正十二・一九一頁a）、『大宝積經論』卷三（大正二六・二一九頁c）や『中論』（大正三〇・八頁b一四頁c）などの薪と火の譬が元になったであろうと指摘される。（深励『浄土論註講義』三〇九頁、昭和六〇年、法藏館）

(10) 善導は、「衆生は垢重くして智慧浅近なり。聖意は弘深なり。あにいづくんぞみづからほしいままにせんや。いま一々にことごとく仏説を取りて、もつて明証となさん」(聖典全書一・六七〇頁、註釈版七祖篇・三一九頁)の第四の明証として、韋提希の見仏を仏力によるものであるとする。

(11) 道綽(五六二〜六四五)は、「大乘仏教は一切平等を説くのであり、浄土・穢土を分別して浄土を願生するのはとらわれである」との批判に対し、「一切諸仏の説法はかならず二縁を具す。一には法性の実理による。二にはすべからくその二諦に順ずべし。かれは、大乘は無念なり、ただ法性によると計して、しかも縁求を謗り無みす。すなわちこれ二諦に順ぜず。かくのごとき見は、滅空の所収に墮す。」(聖典全書一・五九〇〜五九一頁、註釈版七祖篇・二〇八頁)と答える。一切の存在は、固定的な実体を持たず、様々な条件によってそのようにあるというのが大乘仏教の見方であり、諸仏の説法も必ず空と有という二側面をふまえているという。固定的な実体が無いから平等であるという面に捉われて、縁によってそのようにあるという面を否定するなら、かえって大乘仏教の考え方に反すると反論する。

(12) 『華嚴経』は漢訳に三本あるが、例えば、六十華嚴(大正九・六一二頁b)など。

(13) このような展開は、他にも「証卷」四法結釈直前に「定善義」を引用して「西方寂靜無為の樂には、畢竟逍遙して有無を離れたり。大悲、心に熏じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること等しくして殊なることなし。あるいは神通を現じて法を説き、あるいは相好を現じて無余に入る。変現の莊嚴、意に随ひて出づ。群生見るもの罪みな除こると。また讀じていはく、歸去來、魔郷には停まるべからず。曠劫よりこのかた六道に流転して、ことごとくみな経たり。到る処に余の樂しみなし。ただ愁歎の声を聞く。この生平を畢へて後、かの涅槃の城に入らん」(聖典全書二・一三六〜一三七頁、註釈版・三一二頁)とある。

(14) 親鸞は早くより曇鸞と善導の第八像観を解釈された文には注目されていたようで、若き頃(四十五歳頃迄か)の研究ノートといわれている『観経弥陀集註』には、『観経』の第八像観の文に、善導の「定善義」の法界身積(観無量寿経集註の表書、定本親鸞聖人全集七・表九五〜一〇三頁)や『往生礼讃』の法界身積文(観無量寿経集註の裏書、定本親鸞聖人全集七・裏五七〜五八頁)、曇鸞の『論註』の法界身積文(観無量寿経集註の裏書、定本親鸞聖人全集七・裏五五〜五七頁)の一部分を抜き書きされている。

(15) この一体の相について、大江淳誠は「一体の相というのは、衆生の妄心の中に如來の智心が満入して、妄心を融攝して如來の智心と同じものとするのをいいます。」(本願寺出版会『安心論題講述』一六九頁)とする。

(16) 『浄土文類聚鈔』では、これらを端的に「この心はすなはちこれ大菩提心なり。大菩提心はすなはちこれ真實信心なり。

眞實信心はすなはちこれ願作仏心なり。願作仏心はすなはちこれ度衆生心なり。度衆生心はすなはちこれ衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり。この心はすなはちこれ畢竟平等心なり。この心はすなはちこれ大悲心なり。この心作仏す。この心（しむ）これ仏なり。これを「如実修行相応」（浄土論 三三）と名づくるなり、知るべし。三心すなはち一心の義、答へをやりぬ。」（聖典全書二・二七四頁、註釈版・四九四頁）と述べる。

- (17) 善導の当面の文章では、「是心作仏者依自信心縁相如作也言是心是仏者心能想仏依想仏身而現即是心仏也離此心外更無異仏者也（「是心作仏」といふは、自の信心によりて相を縁するは作のごとし。「是心是仏」といふは、心よく仏を想へば、想によりて仏身現ず。すなはちこの心仏なり。此の心を離れてほかにさらに異仏なければなり。）」（傍線親鸞引用部）と、訓読すべきであるが、親鸞は一字を変えて傍線部を引用して独特な訓読をしている。したがって、親鸞が「光明のいわく」として引用した正確な文章はなく、特に「此心」を「是心」として引用することによって、「是心」を他力の信心・菩提心として示そうとされている。

- (18) これらの一連の言葉も善導「散善義」の深心釈（聖典全書一・七六三頁、註釈版七祖篇・四五八頁）による。

- (19) 『安心決定鈔』薪火不離の喩えには、「一、たきぎは火をつけつれば、はなるることなし。「たきぎ」は行者の心にとふ。」「火」は弥陀の摂取不捨の光明にとふるなり。心光に照護せられたまつりぬれば、わが心をはなれて仏心もなく、仏心をはなれてわが心もなきものなり。これを南無阿弥陀仏とはなづけたリ。」（註釈版・一四一〇頁）と木は行者の心、火は摂取不捨の光明に譬える。同書は第八代宗主蓮如上人が尊宗されたことにより大切な書とされているが、西山派の手による書物であることが指摘されていることから、仏心と凡心の解釈も自ずと眞宗義とは相違する事が考えられるので、今は問題としない。

- (20) 『阿弥陀経集註』（定本親鸞聖人全集七）には随所に『阿弥陀経義疏』が書き込まれているが、「是心作仏是心是仏」の問答釈文も書写されている（阿弥陀経集註の裏書、定本親鸞聖人全集七・一三八頁）。

キーワード 法界身 是心作仏是心是仏 信心成就